



女生徒墮ち先生

作:恥辱庵
絵:ひなげし



① 『発端』

早く、早くっ!!
トイレが詰まっ
ちやったの!!

ぼ、僕じゃ
なくても
……っ

急がないと
漏れちゃう
もん!!

そのトイレ
だから
はやくっ!!

う、
うん…

な、
なにを?!

撮れた?

うん
バツ
チリ♪

綺麗に
撮れて
るねー

せんせー
これバレると
マズいん
じゃない?

バレたく
なかつた
からたら
私のペツトに
なっぺね?♡



③「校内探索」

こんなのが
バレたら：ツ

大丈夫よ
どこから見ても
女の子だから

あなた達
四年生？

はい、せんぱい
なんですか？

そっちの
大きい子
スカートが
短いよ

もう高学年
なんだから
身だしなみを
きちんとなさい

制服くらい
きちんと
着なさいよ

なぐい……

はい!!
分かったよね
ゆうきちゃん

4『服装検査』

上級生に
叱られ
ちやったね

ゆうきったら
こんなに短い
スカート
穿いちやって

みんなに
注目されたい
んじゃない？

そ、そんな!!
これは君たちが
……ッ!!

はいはい
言い訳
しないの

はあ〜

かあああ

こーんな
格好のクセに
よくたて
つけるねえ？

大人のくせに
可愛い女兒パンツ
穿いちやってさ

恥ずかしく
ないのお？w











こんなの
やだっ!!

僕、大人
だもんっ!!

はいはい

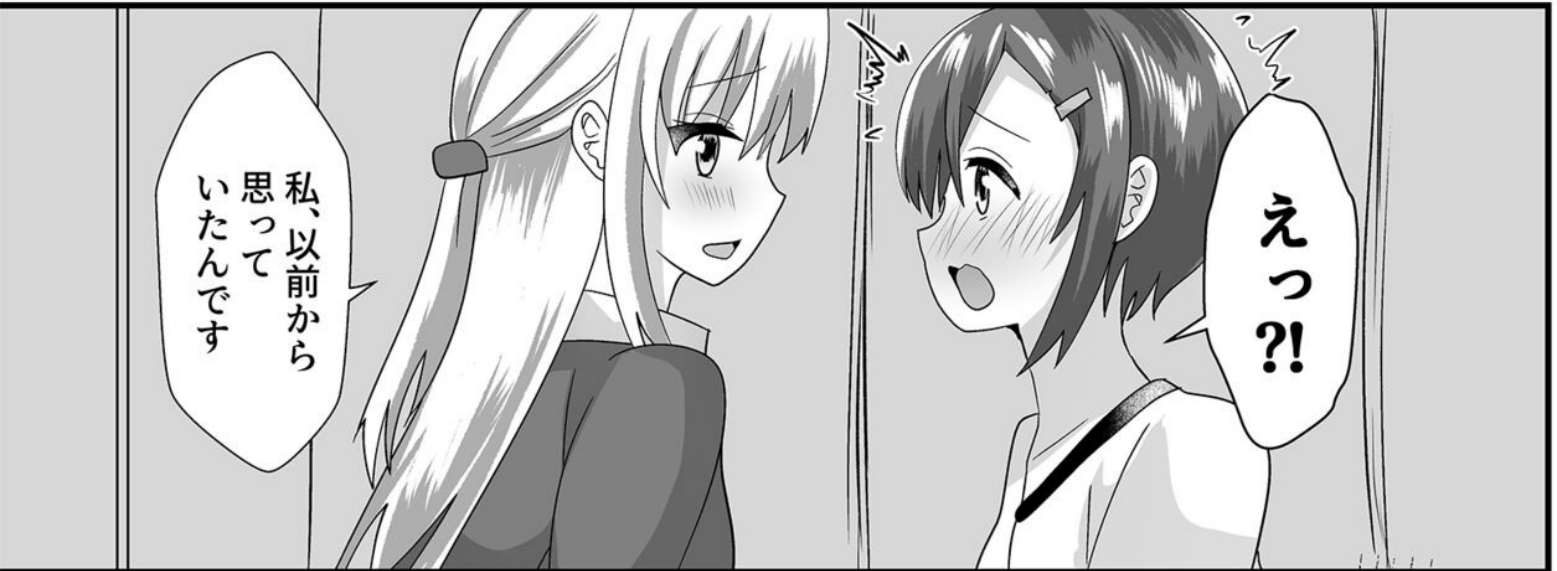
いい年して
女児パンツと
スカートをし
た大人だも
んね?



はい、もうすぐ
終わりまぢゅ
からねえ♪
オムツまで
似合うなんて
びっくりw

本当に
可愛い幼児
みたい♡







9『帰宅』



『おまけ その後の二人』



休日。△学校教諭である三木有樹（25才）は、いつものワンルームマンションで目を覚ました。

カーテンの隙間から差し込む日差しは眩しく、有樹のまだ半分眠っている頭を段々と覚醒に導いていく。いつもの天井。いつもの布団。だがまだ慣れない感覚が朝勃ちした股間にまとわりついている。

「またやっちゃった……」

呟いて布団を捲ってみた有樹の目に飛び込んできたのは、ぷっくりと膨らんだ自身のパンツ。いや、正確にいうとそれはパンツではなく、いわゆるオムツだ。それも大人の尿漏れ用などではない、全面に可愛いイラストがプリントされた幼児用オムツだった。

「こんなこと前まで無かったのに……」

自らの頬を赤らめて有樹は頬に手を当てた。二十五歳独身男性がおねしよしてしまった。文字にするとそれだけだが、本人にとってはたまったものではない。いい歳した男性、それも学校教師が家ではオムツをあてているなんて事が生徒に知られてしまったら大騒ぎだ。「一時的なことだよね……」

彼は自分に言い聞かせて上半身を起こすと、横羽根のテーブルをはがし始める。ビリッという音が狭く静かな室内に響き、彼を更に辱める。開いたオムツの中は大量のおしっこで濡れており、勃起しているのに子供のように小さな包茎ペニスの先にはうっすらと透明の液体が糸を引いている。それが何を意味しているのか、勿論有樹は理解していた。自分がこうなってしまった理由も……。

『ピンポン』

その時、部屋に來客を告げるチャイムが鳴って、有樹は飛び上がるほど驚いた。時刻はまだ八時だ。こんな時間に誰だろう。宅配便にしては早すぎる。しかも訪問者はもうドアの前まで来ている様だ。オートロックを無視して入ってきたのだろうか。

とにかくこの状態で着替えて応対するには無理がある。有樹は居留守を決め込もうとじつと來客が去るのを待つことにした。

だが一分もした頃、もう一度チャイムが鳴った。よほどの用事だろうか。今からでも着替えて出て行くべきか。有樹が悩んでいると、なんと來客がドアに鍵を差し込んで回している音が聞こえてきた。

「うわああっ!!」

今度こそ有樹は心臓が飛び出そうなほど狼狽した。そして、慌てて立ち上がった瞬間、ドアが半開きになり、可愛らしい少女の声が複数聞こえた。

「ゆうきせんせえ、まだ寝てるのお？」

その声には覚えがあった。教え子の一人の恋坂理奈だ。長いツインテールをしたクラス
のリーダー格の女の子で、その分頭が回って気も強い。
続いて大きな声が聞こえる。

「教え子が遊びに来たんだよお、開けてってばあ」

元気な声は御浜咲希に違いない。スポーツ万能な彼女は学級内のムードメーカー的存在
だ。正確も男の子みたいで女子にも人気がある。

「大きな声を出すと近所迷惑よ」

最後に聞こえた声は菊原実桜に違いない。お嬢様で品行方正な生徒だが、時々その本性
を隠しきれずに有樹を困らせる事もある女の子だ。

「ど、どうして、三人が……」

自分で言ってから、ようやく有樹は自身の置かれた立場を思い出した。

数日前、彼は三人の奸計にはめられ、教師にあるまじき写真を撮られたあげく脅迫され、
信じられないほどの痴態を演じてしまったのだ。

「ま、待って！」

そういえば、このマンションの鍵も複製され、オートロック解除の暗唱番号も漏らして
しまった事を彼は思い出す。しかしまさか休日に見かねてくれるとは思ってもいなかった。

「早くあけてよおっ！ そうしないとここで騒いじゃうよお」

理奈の明らかに脅す声が聞こえる。このままだ何と何をされるか分からず、もうこの部屋
には住むことが出来ないかも知れない。いや、それだけならまだしも警察沙汰になれば教
職を失うかもしれない。そんな恐ろしい可能性が有樹の頭を駆け巡り、彼は慌てて玄関に
走った。

「は、早く入って！」

内側の防犯ロックを外すと、彼は三人を部屋に招き入れた。外で騒がれるよりはよほど
マシだとの判断だったが、狼狽していた彼は自身の格好を忘れていた。

「やだ、先生すっぱんぼん！」

咲希がおかしそうに有樹の股間を指さして笑った。

「ち、ちが！ 今起きたところで！」

「先生、起きてすぐにパンツ脱ぐクセがあるんですかあ？」

実桜が口に手をあててクスクス笑う。

「勃起してもお子様サイズですね」

小鳥のような声で囁かれても有樹は恥ずかしいだけだった。

「ちよっとお、せんせえ、おねしょまでしちゃうんだあ！」

今度は知らぬ間に奥に入っていた咲希の笑い声が聞こえる。

「ああっ！勝手に部屋に入らないでっ！」

「だって、部屋って廊下とここしかないじゃん。うわあ、オムツおしっこでびしょびしょ。これ、さっきまで先生が穿いてたんでしょ？」

「そ、それは……さ、さっきまで二歳の甥っ子が泊まって……」

言い訳になるはずも無い嘘をつこうとした有樹だったが、理奈がしたり顔で紙オムツを手を取った。

「そうなの。でも小さい子が漏らしたにしてはすごく重たいけどなあ。あたし、歳の離れた弟がいるんだけど、もつとオムツ小さくて漏らしてもこんなにならないよお……どうみてもこのサイズ、先生のなんですけど」

有樹はがくりと膝をついた。

「お願い、誰にも言わないで……」

実は彼は三人にベニスを見られ、すでに学校の保健室でオムツをあてられた事もあるのだ。だが、あの時の脅された状況とは違い、自らオネショの為にオムツを使っていた事実はまた別の恥ずかしさがあった。

「大丈夫ですよ、先生。あたし達事情は全部知ってますから。でも、オネショしてるのに人のせいにしちゃう先生ってば、小さな子みたいで可愛いですよ」

実桜が子供のように有樹の頭を撫でる。

「あの日以来、梨乃先生の娘になったんですものね。それが心地いいんですよ？」

認める訳にもいかず、有樹は曖昧に口を閉じる。梨乃というのは有樹の同僚の女性教師で、彼女との相思相愛ながら進まない関係を見かねた三人により、二人は数日前から少し不思議な立場の『交際』をしているのだ。

「でも、ちよつとおしっこ以外もついてるわね。先生、まさかオムツで興奮しちゃう変態赤ちゃんになっちゃったの？」

めざとくオムツの汚れを見つけた理沙が嘲笑する。

「い、いや……男はみんな朝方は勃起して……」

「下手な言い訳はいいですよ。あたし達、梨乃先生の趣味も知ってるんだから」
なんとも言えない表情で薄笑いを浮かべる理沙。

「この分だと交際もうまくいってるみたいね」

その点に聞いただけは三人にお礼を言わなければならない。たとえそれが有樹が想像していた形でなかったとしても。

「と、ところで、どうしてこんな時間に三人で……」

ようやく気を落ち着かせた有樹が尋ねると、三人は顔を見合わせて揃って言った。

「先生のデートを応援する為ですよ」

「応援？」

「そう。今日は梨乃先生とデートなんですよ。十時に駅前で待ち合わせだったよね」
理奈が何でも知ってるのよという風に言う。

「ど、どうしてそれを……」

「それくらい分かりますよ。あたし達、先生達の愛のキュービッドですもん」

知らない間にスマホに盗聴アプリをインストールされている事に、機械に疎い有樹は気づいていなかった。

「ところで先生、デートにはどんなお洋服で？」

実桜の質問に有樹は少し考えてから答えた。

「え？ い、いつものスーツのつもりだけど……」

「それじゃあ全然駄目だよ！ 梨乃先生の趣味知ってるだろ！」

咲希の大声に有樹は威圧される。

「梨乃先生は男性としてじゃなくって、小さな娘としてゆうき先生と交際したいって思ってるんですよ。なら、彼女の期待に応えてあげるのが大の男ってものでしょ！」

矛盾した台詞を堂々と吐く咲希だが、勢いに押されて有樹は何も言い返せない。

「そこで、あたし達が先生の為に今日の勝負服をコーディネートしてきましたの」

実桜が百貨店の大きな紙袋を有樹の目の前に翳した。

「さあ、おめかししましょうね」

途轍もなく嫌な予感が有樹の背筋を凍らせた。

「ちょっと待ってよ。その前にそのやらしいもんをなんとかしないと」

理奈が指さした先には有樹の小さなペニス。いや、おちんちんが半ば勃起した状態でぶらぶらと揺れていた。

「こんな状況でも半勃起って、なかなかエロいじゃん。梨乃先生の事考えてたの？」

「うん、ま、まあ……」

曖昧に返事した有樹だったが、理奈は何もお見通しだった。

「嘘つきなさい、本当はあたし達に粗チンを見られて興奮しちゃってるくせに！」

「ば、馬鹿な事をいうのはやめなさい！」

とっさに教室にいるかのような振る舞いをする有樹だったが、理奈は執拗だった。

「以前見られた時からクセになっちゃったんだよね。それから、これも気持良かったんですよ」

おしっこを吸ってぶにぶになった紙オムツを手にとって嘲笑する理奈。

「そ、そんな事！」

「これって、梨乃先生が買ってくれたオムツなんですよ。あたし達知ってるんだから」

確かにそうだった。あの事件の後、もしもの為にということで、梨乃が有樹に買い与えたのがこの幼児用の紙オムツだった。

「ねえねえ、大人のクセにオムツにオネショして気持良かった？ そりやそうよね、憧れの梨乃先生が買ってくれたオムツだもんね。きつと梨乃先生に優しくあててもらって、オムツの上から優しくなでなでされる夢でも見ながら漏らしちゃったんじゃない」

「な、何を……」

そう言いながらその指摘は半ば当たっていた。有樹は今朝方、梨乃との淫夢を見ながらオネショ、そして夢精間近まで至っていたのだ。

「じゃあ、まずはその処理から始めましょうか」

「えっ!？」

実桜の言葉に有樹は驚いた。

「ど、どう……」

「いいですから、まずはそこに横になって下さい。新しいオムツあててあげますからねえ」

「ま、待って!」

抵抗する有樹だったが、理奈と咲希に押さえつけられれば小柄な有樹にはなすすべも無い。彼はもう一度床に敷かれた寝床に横たわらせられてしまった。

「はーい。良い子でオムツあてましょうねえ」

実桜は紙オムツの大きなパックから一枚取り出すと、慣れた手つきで紙オムツを広げていく。

「あたしも小さい頃、妹のオムツの世話をしましたから……梨乃先生じゃなくて申し訳ありませんけど、我慢してね」

「や、やめっ!」

教え子にオムツをあてられる。しかも△学生の女の子に。考えもできない屈辱的なシチュエーションに有樹は必至に抗った。

「大人しくしなよ。でないと、この動画もアップしちゃうよ」

気がつけば咲希がキッズスマホでこちらを撮影している。有樹は覚悟を決めるしかなかった。

「良い子ですよ。そうそう、手はぎゅっと握っておみものなりにしててね」

実桜はどこにそんな力があるのか、細い腕で有樹の両足を持ち上げると、お尻の下に紙オムツを敷き込む。

「新しいオムツ気持ちいいでちゅかあ？」

顔をのぞき込んで囁いてくる実桜の優しい声に有樹は癒やされそうになるが、ほんの少しの理性がそれを拒絶する。

「んふふ、今は先生は赤ちゃんにいいの……はい、前当てを被せるね。恥ずかしいおち

「んちん、ないないしちゃうよお」

あくまで幼児に話しかけるように実桜はオムツをあてていく。

「そんな風にするのかあ」

咲希の感心する声に実桜が「覚えておいてね。今度やつてもらおうから」と物騒な言葉を返す。

「じゃあ、横羽根のテープをとめるね。どう？　くるしくない？」

有樹は黙って頷くしかない。

「はい、オムツできたよ。大人しくあてられて偉いねえ」

実桜に頭を撫でられながら、有樹は段々とおかしな気分になってしまう。

「びゅっびゅっするまえに、おしっこ出しときましようか」

「えっ！？　いや、もう出ないよ……」

「うそいいなさい。まだ出るでしょ。大人の男の人だったら、幼児用オムツで全部吸収できる筈なんですもん」

確かに有樹は起きてからトイレに行く暇も無く、夜中にオネショしたとはいえまだ膀胱にある程度の尿は溜まっていた。しかしだからといって、オネショとお漏らしとは訳が違う。

「あ、後からトイレに行くから……」

「駄目です。今日から先生のトイレはオムツなんですから」

「そ、そんな……」

「その方が梨乃先生も喜ぶと思いますよ。その為にそのオムツも買ってくれたんじゃない？」

梨乃の特殊な性癖を思い出し、有樹の心が揺れる。いわば実桜は彼に言い訳を与えてくれたのだ。

「で、でも……起きてるのに出すなんて……」

「じゃあ、目を瞑って。ぼんぼんしてあげるからゆっくり漏らしなさい」

言われるまま有樹が目を閉じると、実桜は彼の背中を優しくトントンと叩き始めた。社会人、いや高校生くらいになつてから、そんな風に優しくされた記憶などない有樹にとって、それは言い様のない蠱惑的な感覚だった。加えて疲れ切った寝不足の体に実桜の寝かしつけは効果観面に作用する。

「さあ、トイレに座っているのを想像して……しーっ……　しーっ……」

実桜のおしっこを誘う声に、有樹は段々と催眠に落ちていくように尿意をペニスの先に移していく。

「いいのよ、ゆうちゃんは赤ちゃんだから、そのままおしっこしようね」

気がつけば、ペニスの先から数滴のおしっこが漏れていた。駄目な事だと心の底では思

いながら、一旦始めた尿はもう止まらなかった」

『シャーッ!』

気がつけば部屋内に有樹がオムツに漏らす音が聞こえる。

「出ないっていった割に、元氣におしっこ出てるじゃん」

「オムツにおしっこ出せて偉いねえ」

「今、先生、オムツにおしっこしてるんだあ」

「いい歳して赤ちゃんみたいに本当にオムツ使っちゃったねえ」

「うわあ、どんどんオムツ膨らんでくる。匂いもしてきたよお」

「教え子の女の子に見られながらオムツ汚す気分はどう？」

理奈と咲希の意地悪な声に有樹は我に返るが、今更もう出し終わるまで放尿は止まらなかった。

「全部出た？」

実桜の優しい声に、顔を真っ赤にして有樹は頷く。

「おむつ、あったかくなったね。ほら、お漏らしサインも色が変わったよ」

見れば、股間にある二本のラインは、黄色から水色に変化している。

「なんだよ、これ？」

咲希の問いに実桜が答える。

「これはね、オムツが濡れてますよって、お母さんがオムツの中に手を入れてなくても分かるようになってるサインなのよ。だって、赤ちゃんは自分でお漏らししちゃったって言えないでしょ」

「そっか、ねえ、先生お漏らししたの？」

不意に問われ、有樹は答える事ができない。

「なるほど、こういう事だな。先生も赤ちゃんだから、お漏らししても言えないんだあ。

可愛いっ!」

徹底的に赤ん坊扱いされる屈辱に、有樹は耳まで赤くなった。だが恥辱の時間はまだ始まったばかりだった。

「ねえ、先生。勃起してるでしょ？」

不意に耳元で囁かれ、有樹はどきりとする。

「隠さなくたって分かってるよ。先生、オムツに漏らし終わってから少しずつ大きくなってきたんだよ。オムツにお漏らしするのが気持良かったの？ それとも教え子の小さな女の子達に見られながらオシッコして恥ずかしさに感じちゃった？ ほら!!!」

「んっ!!!!!!」

不意にオムツの上から股間を握られ、有樹は声にもならない声を漏らす。

「だ、だめっ!やめなさい!」

有樹は止めさせようと股間に手を伸ばすが、すぐに咲希が彼の両手首を掴んでパンザイのポーズをさせてしまう。

「いいから、大人しくしてなさいって」

「い、いやっ！ いやあっ！」

「こんな状態じゃ梨乃先生に失礼でしょ。一回すっきりして、女の子になってからデートに行きましょうねえ」

理奈はオムツの上から有樹の小さなペニスを探りあて、指で挟んでゆつくりと上下に擦っていく。

「んっ！！ ああっ……いやあ……」

「んふふ、女の子みたいな声で鳴くのね。先生、可愛いわよ」

お漏らしして膨らんだ紙オムツの上からなので、早漏の有樹といえどもなかなか達する事は出来ない。だがそれ故に、有樹は真綿で首を絞められるような、じわじわとした終わりの無い快楽拷問を受けているようだった。

教え子にオムツをあてられ、見られながらその中におしっこをさせられ、その上からペニスを刺激されている。そんな背徳的な状況に、生真面目な有樹は完全に心を預ける事ができず、悶々と射精に耐えるしか無かった。

「そろそろなんじゃない？」

だが我慢にも限界がある。有樹だって精通した男性だ。可愛い女の子に執拗にペニスを刺激されれば興奮してしまうのも仕方無いだろう。

「んっ！！ んっ！！ で、でちゃ！！」

やがて有樹は尻を浮かせ、自ら腰を振って、オムツの中に射精してしまった。

「さやはは！ おもしろーい！」

「ブルブル震えて、電気通されたみたいだったね！」

「ぼつちり録画もできたよお」

オムツの中に射精してしまった後悔と喪失感の中、有樹は情けない顔で枕に顔を埋めて泣くしかなかった。

「さて、ようやくおちんちんも縮んじやったし、お出かけの準備をしようっか」

理奈は舌なめずりをして有樹のペニスを指でつついた。

「まずはばんちゅですよ」

軽くシャワーを浴びて全裸にされた有樹に、実桜が女兒用パンツを手渡す。またもやオムツをされるかと思っていた有樹は少し安心したが、その下着はオムツと変わらないくらいの恥辱的なものだった。

「ブリガールのパンツ似合ってるよ」

口に手をあてて失笑しながら咲希が言う。真っ白なコットンの生地になんか女児向けアニメの大きなイラスト。お腹を冷やさないように丈の長い女児パンツはお臍の部分に小さなピンクのリボンがついている。両脇には飾りレースがあしらわれ、太もものゴムが優しく有樹の足を締め付ける。幼稚園児の女の子が喜びそうな女児パンツ一枚の姿を見られて、有樹は屈辱感に包まれた。

「はい、次はスリーマよ」

だがお着替えはまだ始まったばかりだ。用意された上の下着はパンツと同じくブリガールのキヤラが大きく描かれた、およそ成人男性が身につけるものでは無かった。

胸元にはパンツと同じ様なリボンもあしらわれ、首回りは薄いピンク色のフリルが縁取られている。首を通すと、有樹はブリガールのCMに登場する女児のような姿になってしまった。

「先生が小柄で良かったですわ」

女児向けサイズがびったり着れてしまう有樹に感心したように実桜が微笑む。だが身長がコンプレックスの彼にとつて嬉しい筈も無い。

「こちら合うといいんですけど」

続いて有樹は真っ白なブラウスを羽織られる。大きな丸襟にはたつぷりのフリルがあしらわれ、清楚な中にも女の子の愛らしさを引き立てるデザインだ。当然ながら左ボタンを留めるのに苦労しながらも、有樹は不器用にその衣装を身に纏う。

「上着はこれよ」

実桜が手に取ったのは、およそ小学生でも身につけるのを恥ずかしがるであろうデザインのピンクのジャンパースカートだった。大きく広がった三段重ねのスカートは股下少しまでしかなく、メイドさんのエプロンのような胸元は大きなリボンで飾られ、同じくフリルのついた肩紐の上にブラウスの衿がとてもし合っている。

最後にレースとリボンのついたハイソックスを履かされ、短い髪の毛をイチゴ型の飾りリボンで括られば、有樹の姿はすっかりとおめかしした小さな女の子になってしまった。

「うわぁ……思った以上ね……」

思わず理奈が絶句する。

「ちえっ！　なんか、あたし嫉妬しそうだよ！」

「えへへ、あたしのコーディネート凄いでしょ」

咲希の台詞に実桜がえへんと胸を張る。

「さあさあ、鏡見てみましょうね」

洗面所に連れられ、自身の姿を見た有樹は当然のように真っ赤になってしまった。

「これならどこに出しても恥ずかしく無い女の子ですよ」

「で、でも……」

実際はそう言うが、やはり成人男性である有樹の身長は違和感を拭いきれない。これがまだ小学校高学年くらいをイメージした服装なら、おおよそ誰も疑わないレベルの女装となっていただろう。しかし今、有樹が着せられているのは小学校低学年、下手をすると幼稚園児の女の子のような洋服なのだ。この姿でデートに挑まなければならないのかと思いだし、有樹は戦慄した。

「や、やだ！ こんな格好じゃ、梨乃先生に笑われちゃう！」

「今更何言ってるの」

子供のようにイヤイヤと首を振って懇願する有樹の手を掴み、理奈は彼を玄関へと引っ張っていく。

「ほら、靴履いて」

既にそこには真っ赤な女兒靴が用意されていた。有樹の衣装によく似合う、セミフォーマルなシューズだ。

「靴も忘れないでね」

プリガールのアニメ靴をたすき掛けされると、有樹はマンションの廊下に押し出されてしまった。屋外の風がふわふわとした衣装に吹き付け、有樹の心をこれ以上ないくらい不安にされる。

「待ち合わせは三つ隣の駅だったよね。私たちは少し離れて見てるから、デート頑張りなさいよ」

「そ、そんな！ 一緒に来てくれないの！？」

少しでも多人数の方が目立たない。有樹が哀願したのも当然だった。

「先生、馬鹿？ デートに教え子三人も連れて行く人がどこにいるの？」

「だ、だって！ こんな格好で！」

「大丈夫よ。梨乃先生も喜んでくれるわよ」

確かに梨乃の性癖を考えれば、理奈の言うこともあながち間違っていない。だがそれとこれとは話が別だ。こんな姿で職務質問でも受けたら人生が終わってしまう。

「ほら、早くいかないと遅れるわよ。それとも、今すぐに人生終了したい？」

有樹の心を読んだかのように理奈が脅す。もう有樹に選択肢など無かった。

「な、なにかあったら助けてよ」

とうに成人の男性が教え子の小さな女の子達に、涙ながらに不安げに助けを求めている。それはとても滑稽な姿だったが、理奈のサドっ気を更にかき立てた。

「分かってるわよ。ほら、行きなさい」

誰にも会わないようにと祈りながら有樹は一人でエレベータに乗り込む。幸いな事に一階には誰も待つてはいなかった。おそろおそろ死んだ気になってマンションを出ると、春の日差しが暖かい。不意に吹いた風がスカートを揺らせ、彼は慌ててその裾を抑える。

「む、無理だ、こんなの……」

だが振り返ると三人娘がさっさと行けという風にジェスチャーをしている。もう部屋に戻る事もできなかった。

急ぎ足でいつも通勤に利用している駅に向かう。駅にはたった三分ほどだったが、今日は休日の朝型、誰にも会わないと言うわけにもいかない。

最初に出会ったのはうどん屋の看板娘だ。二十歳そこそこの可愛い彼女の事を時々その店を利用する有樹は知っており、相手も恐らくは彼の事を覚えていただろう。目を合わせてはいけない。有樹は足早に通り過ぎようとしたが、誰にでも愛想の良い彼女は有樹を見て大きな声で言った。

「行つてらっしゃい。車に気をつけるのよ。知らない人について行っちゃだめよ！」

有樹だとは気づかれてないようだったが、完全に小さな子供に語りかけるような言葉に有樹はほっとしながらも、たとえ様の無い屈辱感を感じる。声ではれないように、女の子の方を向いて黙って頷く。だが、その瞬間彼女の表情が急変した。

「えっ!？」

声が出る前に有樹は走り出した。しまった。ばれてしまったかもしれない。心臓が胸から飛び出そうになる。もうあの店には行けない。それより引越も考えないと……そんな風に思っていると肩から掛けている鞆が振動するのに気がついた。

中を開けると理奈達が入れておいたのであろう、スマホにメッセージの着信が入っている。

『大丈夫、ばれてないよ。今の子、私の妹なんですって言っておいたから』

有樹は再び安堵したが、理奈に妹扱いされる恥辱もまた耐えがたいものだった。その後、部活に行く様子の中高生や買物に出かける親子連れなど数人とすれ違ったが、有樹は顔を上げる事さえできなかった。

ただ、すれ違った人物の多くが目立つ彼の姿を凝視しているのが感じられ、時には小さな女の子の声で「可愛い」と聞こえたりしてその度に彼は肝を冷やしたのだった。

ようやく駅につくと、再びメッセージが届いた。

『小児用を買わないと怪しまれるよ』

いつもの定期は持つてなかったが、考えもしない指摘をされて有樹は戸惑った。確かにこの姿で大人用の切符を買うのはおかしいかもしれない。だが自分は教師だ。いくら子供のような格好をしているからといってそれは犯罪では無いか。

しばし迷ったあげく、彼は小児用の切符を買った。後日間違ったといつて支払いに比べ良い。今はこの姿を怪しまれない事が何より重要だった。しかし小児用と大人用は何が違うのだろうか。自動改札なのに駅員はどうやって見分けているのだろうかと有樹はふと疑問に思いながら改札をくぐった。その瞬間

「びよびよびよ！」

自動改札の機械から大きな音が鳴って有樹は驚いた。それは小児用の切符が使用された事を示すブザーだ。思わずこちらを見た改札口の女性駅員と目が合う。「終わった」と覚悟した有樹だったが、女性駅員はにっこりと笑って「氣をつけてね」と言ってくれた。

またもや小さな女の子扱いされた屈辱と安堵の入り交じった複雑な気持ちに囚われながら、有樹は来たばかりの電車に逃げるように飛び乗った。

車内には十数人の乗客。隣の車両に理奈達に乗っているのも見えた。目立たないように端っこの椅子に座ると、足をびたつと閉じて俯いたまま目的の駅に着くのを待つ。だが、次の駅に着くと目の前に席に賑やかな女子△学生達が座ってしまった。

「ねえねえ、前の子ちよつと変じゃない？」

年齢特有の遠慮の無い会話が耳に入り、有樹はガクガクと足を震わせる。

「いくつくらいかな？ あたし達と同じ五年生くらい？ この歳でプリスタイルの全身コーディネートとか無いわあ」

どうやら実桜の選んでくれた有樹の服装の事らしい。好きで着てるんじゃないからどうかほうっておいてほしいという有樹の願いを無視して彼女達は遠慮無い言葉を交わす。

「うちの二年生の妹だつてプリスタイルなんて幼稚園だつて言うよ。いい歳して恥ずかしいのかなあ？」

「ひよつとして、まだ幼稚園児だつたりして」

きやははと笑い合う女の子達。そのあまりの騒がしさに周りの乗客も少し迷惑気味だ。この子達は一体どんな教育を受けているんだ。その時、有樹の心に少しばかりの教師魂が芽生えてしまい、彼は少しだけ顔を上げて女の子達を見た。

「んん？」

だがそのほんの一瞬にそのうちの一人と目が合ってしまう。およそ△学生とは思えない大人びたファッションの彼女達は立ち上がって有樹に話しかけてきた。

「なんなのお嬢ちゃん。文句あんの？」

恐らく、少しの罪悪感があるのだろう。その弱い心を友達に知られたくないように強気に振る舞うという思春期特有の行動だ。教師である有樹にはよく分かった。

「い、いえ……何も……」

だが今はこの格好で、静かにしなさいなどと注意できる訳も無い。彼は大人しい女の子を装うしかなかった。教師としては、君たちはどの△学校なんだと聞くような場面だが、

「お嬢ちゃん、どこの△学校？」

「何年生？」

逆にそう聞かれたのは有樹自身だった。

「そ、その……」

思いがけない人物達に絡まれ有樹の頭はパニックになる。

「そんな可愛いお洋服着てるなんて、きつと低学年だよね、つてお姉さん達話してたんだあ。プリスタイルのお洋服好きなのお？」

少女はあくまで舐められないように上から話してくる。悔しかったが有樹は年下の女の子になりきるしかない。

「は、はい……」

出来るだけ高く可愛い声を装って返事をする、少女達は顔を見合わせて勝利を確信したかのように笑い合った。

「何年？」

話し方がぞんざいになる。有樹は仕方無く適当に「三年です」と、細かい声で答えた。

「そっかあ、三年生にしては大きいねえ。本当は六年とかじゃないの？ 正直に言ってみなさい。年上だからって、いい歳してそんな可愛いお洋服着てるからって遠慮しなくていいんだよお」

きやはははと笑う少女達。有樹の実際の年齢を知ったら、男だと知ったらどんな騒ぎになるだろうか。

「ほ、ホントに三年生です。あ、あの……可愛いお洋服が好きで……」

「うんうん、そのくらいの年齢だと可愛い服欲しいもんね。とっても似合ってるよ、似合すぎて幼稚園児かと思っちゃったあ」

どんなに馬鹿にされても有樹は言い返す事も出来ない。

「じゃあ先輩に対して生意気に睨んだ事を謝ってくれるかなあ」

「えっ？ に、睨んでなんて……」

「嘘つけ！ こっち見て笑っただろ！」

「そ、そんな！」

もう完全に少女達は悪のりしていた。集団になると際限が効かなくなるこれも思春期特有の症状だ。

「ほら、謝れって！」

頭を小突かれ、有樹は必至に謝罪の言葉を考える。この少女達が何を欲しているのかを。

「う、ごめんなさい……」

有樹はその場から逃れる為、屈辱的な言葉を口にした。

「こ、後輩なのに……まだ三年生なのに、五年生のお姉さん達に失礼な態度をしてごめんなさい……あ、あたし、お、お姉さん達を見習って、格好いい、可愛いお、女の子になりたくて、背伸びしちゃいました。ごめんなさい……」

あまりの理想通りの謝罪だったのか、しばしのあいだ少女達はぼかんとして、それから

順番に有樹の頭を撫で始めた。

「分かればいいのよ。あなたも、もう三年生なんだから、もう少し大人っぽい服装にした方がいいわよ」

「は、はい……オシャレなお姉さん達を目標に頑張ります……」

すっかりと満足したように少女達は次の駅で手を振って降りていった。一人残された有樹は恐怖と情けなさで全身が震えるのを抑えきれなかった。

目的の駅に着き、改札をくぐる。だがすっかりと油断していた彼は駅員に呼び止められてしまった。

「ちょっと待って！」

見れば若い女性駅員がこちらに歩いてくる。今度こそ有樹は全てが終わったと覚悟した。

「あなた大きいけど本当に△学生？」

「そ、その……」

「年齢が分かるもの持ってる？ 児童手帳とか△学校の名札でもいいわよ」

「え、えつと……」

正直に言ったら差額を払って許してもらえるだろうか。いや、親や学校に連絡するなんて言われたら全てばれてしまう。走って逃げ出すか、この女兒靴ではすぐに追いつかれるに達しない。人生最大の窮地に立たされ、有樹は心底狼狽した。

「あ、あの……その……」

言葉が出ずに、代わりに涙が溢れてくる。助けて。理奈ちゃん……梨乃先生！ 助けてよ！ 気がつけば声に出ていた。

「うえええん！ たすけてよおっ……」

「ちょ、ちよつと、泣かないで。こっちでお話しようか」

背を抱くように押され、有樹は駅員室に誘導される。そんな密室に連れて行かれてはもうおしまいだ。彼が全てを覚悟したとき、背後から優しい声が聞こえた。

「ゆうちゃん、どうしたの？」

振り返ると、梨乃が立っていた。有樹は思わず彼女に抱きついた。

「うわぁあん！ 梨乃先生い！」

「あの？ どうしたんですか？」

梨乃が駅員に事情を聴く。

「この子のお知り合いですか？ 実はこの子が小児切符で改札をくぐったのですが、少し大きいご年齢に見えたのでお話を聞いてたんです」

「ああ、そうですか」

梨乃は理解したという風にゆつくりと言った。

「この子は私の学校の教え子です。五年生なんですけど、大きいからよく中学生かと間違われるんですよ」

身分証を示した梨乃に、駅員は心底申し訳ないと謝罪した。

「ごめんね。お姉さんが悪かったわ。これあげるから泣き止んで」

駅員は迷子をあやすのに使うのか、鉄道のマスコットキャラの人形を有樹に手渡した。

「考えたら、そんな可愛いお洋服なのに、中学生の筈が無いよね。お姉さんを許してくれる？」

有樹は人形を胸に抱きしめて、こくりと頷いた。

「びっくりしましたよお、待ち合わせ場所についたら先生が駅員さんと揉めてるんだもん」

「す、すみません……でもどうしてこんなに早く？」

待ち合わせ時間にはまだ三十分もあった。

「実は、先生の教え子の理奈ちゃんから『助けてあげてって』連絡があったんです。時間があつたから、その喫茶店に入ってたんですけど」

「そ、そうですか……どうしてかなあ……」

今朝の出来事を話す訳にもいかず有樹はとぼけた振りをした。だが実は理奈の方も早く待ち合わせ場所に来て、一人で恥ずかしがっている有樹を窓から観察して楽しもうと思っていたのだ。

「それにしても、先生、可愛過ぎますよおっ！」

不意にぎゅっと抱きしめられた有樹はようやく自身の股間が濡れている事に気がついた。

「あれっ？ ひよっとして、ゆうちゃんお漏らししちゃったのお？」

有樹のおかしな様子に気がついた梨乃が意地悪そうに言う。見れば、彼の鞄下はおしっこでびしょびしょだった。

「そっかあ、駅員のお姉さんに実は成人男性ですって、ばれるのが怖かったんだあ」

「ちよ、ちよっと！ もうちよっと小さな声で！」

「いい歳してお漏らしなんて恥ずかしいねえ。だから、ゆうきちゃんにまだパンツは早いって言ったのにい。今日はオムツあてて来なかったの？ 折角可愛いオムツ買ってあげたのに」

「こ、ごめんなさい……」

「いいわ。丁度、そこに公園があるから着替えましょうか」

「えっ！？ こ、公園！？」

「まさか恥ずかしいなんて言わないよね。いい歳した男の人なのに、そんな可愛らしい幼稚園児の女の子みたいな格好でここまで来て、自分より年下の女の子に叱られてお漏らし

してしまうような先生が、お外でお着替えくらい平気だね」

そうまで言われては返す言葉も無い。有樹は子供のように梨乃に手を引かれ、濡れたパンツのまま駅近くの公園につれて来られてしまった。

「じゃあ、まずはパンツ脱ぎましょうか。スカート捲りあげてちょうだい」

午前中とはいえ、数人の家族連れや子供達がいる公園の隅で有樹は仕方無く言われるままスカートをたくし上げる。

「んふふ、パンツもしっかり女兒用じゃない。自分で買ったの？」

「そ、その……」

答える事も出来ない有樹を梨乃は更に辱める。

「ブリガールのお姉さん達、ゆうちゃんのおしっこで汚れちゃったね。ごめんなさい、言える？」

「え、えっと……」

「良い子にしないとずっとこのままよ。ほら、誰かに見られちゃう前にごめんなさいしよるか」

梨乃は低学年の担任である。小さな子供のあしらい方は実に堂に入っていた。

「そ、その……ブ、ブリガールの、お、おねえちゃんたち……ゆ、ゆうきのおしっこでよごしちゃって、ごめんなさい……」

「うん、良く言えました。今度からオシッコ出そうな時は先生に言えるといいね。じゃあ脱がすよ」

一気にパンツを下ろすと、公園を吹き抜ける風におしっこで濡れたペニスがひやりとする。

「は、早く、代わりを穿かせて！」

このままでは犯罪になってしまう。有樹は必至に懇願する。

「大丈夫よ。こんな小さなおちんちん見て、誰が成人男性って思うのよ。むしろ、体が大きいのにまだ幼稚園なのかなって納得されるわよ」

「で、でも……」

「はいはい、じゃあ穿かせてあげるから。そこに横になろうか」

「えっ！？　じ、自分で穿け……」

戸惑う有樹を横目に、梨乃は鞆からブリガールのレジャーシートを取り出し、芝生の上に敷き詰める。

「駄目です。お漏らししちゃう子はこれをしてないよね」

梨乃は有樹の持っていた鞆から紙オムツを取り出した。

「あっ！」

「んふふ。ずっと自分でオムツを持ち歩いてた事知らなかったの？　ママとお散歩する

赤ちゃんみたいで可愛いわね。さあ、ごろんでできるわね」

知っているのだ。理奈が自分の鞆にオムツを入れた事も。となれば、今朝三人が尋ねてきたのも全て梨乃の手の内だったのかもしれない。

「マ、ママ……あたし恥ずかしい……」

そんな梨乃が恐ろしく、そして頼もしく感じ、有樹は思わず『ママ』と自然に口にした。梨乃はこれ以上ないくらい喜びの表情を浮かべ、有樹のおしっこなど全く汚くないかのようにオムツ替え用お尻拭きで丁寧に彼の股間を拭いていく。

「き、汚いよ、ママ」

「可愛い赤ちゃんのおしっこですもん。何が汚いんですか」

股間を拭き終わった梨乃はベビーパウダーをはたくと、有樹のお尻を観察する。

「ゆうちゃん、今朝もオネショした？」

「ど、どうして……」

「正直に言いなさい」

「……は、はい……オネショして、オムツ汚しちゃいました……」

「やっぱりね。お尻が少しかぶれてるもん。あまり悪くなったら乳幼児皮膚科に連れて行かないと……」

「ええっ！」

そんな事をされては大変である。多くの赤ん坊と一緒にオムツかぶれを診察されるところを想像して有樹は残っていた尿を漏らしてしまう。

「あらあら、本当の赤ちゃんみたいね」

ちつとも迷惑では無いように理奈は再びペニスを拭き終えると、軽々と有樹の足を持ち上げて紙オムツを敷き込む。

「ねえ、ゆうちゃん。一緒に住まない？」

「えっ？」

不意に問われて、有樹は胸を高鳴らせた。

「はい、可愛いおちんちん、ないないしようねえ」

梨乃は前当てをあてながら、語る様に言った。

「あたし達相性もいいみたいだし、将来一緒にいることを前提に私の部屋でどうかしら？」

「で、でも……僕は……」

梨乃の性癖を有樹は理解していた。だが有樹本人は梨乃の趣味に合わせる気持はあっても、心の底からそれを楽しんでいる気は無かった。今日だって、教え子達に脅されて仕方無くこんな姿でここまでやってきたのだ。

「本当にそうかしら？」

有樹の気持を察したように、梨乃はオムツの横羽根を留めてからそつと股間に手を当て

る。

「ほら、オムツの上からでも分かるよ。ゆうちゃんのおちんちん、もう元気になってる」

「そ、そんな事……」

「お外でオムツ交換されて興奮しちゃったんだよね。小さい子みたいに、可愛らしい女の子用の衣装で公園でオムツあてられて、恥ずかしくて、情けなくて、でもちよつと気持良くなったんだよね」

「う、うそ……そんな……」

そう言いながらも、彼は自身のペニスが勃起しているのを自覚していた。

「もう認めなさい。ゆうちゃんは恥ずかしい事が好きな、本当は成人男性だけど、私の前では可愛い娘。小さな赤ちゃんみたいに、まだ自分では何も出来ない女の子。着る物だつて私に選んでもらって、オシッコも自分では行けずにオムツの中に漏らしちゃう可愛い可愛い私の娘」

話しながら、梨乃は有樹の股間を揉んでいく。

「無理して学校の先生なんてしないでいいの。そんな向いてない仕事止めちゃって、あたしが扶養してあげる。あたしがゆうちゃんを一から女の子として赤ちゃんから育て直してあげる。幼稚園は私立がいいかな。可愛い園児服で登園するゆうちゃんを想像するだけでママ、イっちゃいそうなの」

もう有樹のものはオムツの中で限界寸前だった。

「それから小中一貫の女子校に通おうか。その頃にはオムツ外れてたらいけど、外れて無くても制服の吊りスカートの下にオムツちららせて、お友達に笑われながら登校するゆうちゃんの姿も見たいなあ」

「マ、ママ！ もう出ちゃうよお！」

「じゃあ、返事してくれる。ママの娘になってくれる？」

梨乃はびたりと手を止めた。

「い、意地悪！ 止めないで！ マ、ママの娘になるから！ 仕事もやめてママの可愛い赤ちゃんになりたいの！ 良い子になるから！ ちっちゃな女の子にして下さい！」

「うん、とっても良い子ね」

再び梨乃が擦り出すと、今日二度目の射精を有樹はオムツの中にたっぷりとしてしまった。

「じゃあ今日は早速家具とか見に行こうか。ベビーベッドに、オムツやベビー服を入れるベビータンス。歩行器とかガラガラとかおもちゃも欲しいわね。サークルメリーも憧れてたんだあ。その後はお洋服ね。そうだ！ 明日から学校にも女兒服で通勤しなさい。そして、辞職願いとかが届ける手間も省けるし、大勢の生徒に可愛いゆうちゃんも見てもらえ

るよ！」

「そ、それはいくらなんでも……」

これから始まる梨乃との恥ずかしくも悦びに満ちた生活を想像し、有樹は出したばかりなのに、オムツの中でペニスをおつきさせていた。

「やれやれ、本当に手間のかかる先生達だったこと」

梨乃達は公園でのやりとりを確認した後、反省会のように近くのファーストフード店でおしゃべりしていた。

「でも有樹先生が学校辞めちゃうと面白くなるね」

残念そうにする実桜に、咲希が提案する。

「まあ、いいじゃん。新婚家庭？にお邪魔してたつぷりと可愛がつてやろうぜ」

「それもそうね、じゃあ今から出産祝いのプレゼント買いに行こうか？」

「いいわね。ベビー服がいいかな？ 布おむつとおむつカバーのセットがいいかな？ 出来るだけ可愛くて有樹先生が恥ずかしがるもんを選ぼうよ」

「全く、理奈は本当にサディストだよな。そうそう、そういえば、今度教育実習に来る大學生が可愛って噂だよ」

「ホント？ 小柄で女顔だったらいいなあ。またやつちやう？」

三人娘のおしゃべりはずつとずつと続いていた。